

「上方」放送文化の成立と変容

～人と番組のネットワークに注目して～

JOBK のメディア史研究会 共同代表

丸山友美¹

¹法政大学大学院 社会学研究科 社会学専攻 (採択当時)

要約

本研究は、戦前・戦後を通じて大阪放送局（JOBK）で形成される「上方」放送文化を明らかにすることを目的に、「史料の収集・整理」「聞き取りと史料調査」「番組分析」の三つの角度から研究を試みた。1年の調査・研究から、正しい社会の価値を「与える」のではなく、社会にあるさまざまな価値観を放送に「のせる」仕事こそ「大阪的＝ローカルな」放送として理解・共有されていたことが見えてきた。

目 的

本研究は、戦前・戦後を通じて大阪放送局(以下、BK)で形成される「上方」放送文化の展開を、人と番組を結ぶネットワークから明らかにすることを目的にもつ。これまでNHKや民放各局は『放送史』や社史を編纂し放送事業を鳥瞰的に記述してきた。近年は、番組アーカイブの整備が進み、放送事業を虫瞰的に検証する学術研究も進展している。だが多くは、東京（AK）を中心とする視点で描かれる傾向があり、各地域局の活動やその意義については、十分に検討されてこなかった。

貴基金の助成を受けて実施した2017年度の調査では、NHKアーカイブや放送博物館にのみ所蔵されながらほとんど言及されてこなかった放送確定表を通史的に閲覧し、その周辺資料の調査やインタビューを同時並行的に行うことで、教養と娯楽を結ぶ人と番組のネットワークが見えてきた。2018年度は、これまでの成果を踏まえ次項で述べる点に留意して研究を行う。

方 法

本研究は、上述の研究をすすめる重点作業として、資料収集と社史編纂に携わった人々へのインタビュー調査を実施する。具体的な作業は、それぞれ3つのテーマを掲げて進める。

■ 第一のテーマ「紙史料および音資料（インタビュー）の収集・整理」：(4月-8月)

2017年度は、大阪の府立中央図書館や国際児童文学館、東京の国立国会図書館や法政大学図書館、放送博物館や放送文化研究所の協力を得て資料を渉猟した結果、これまで言及されてこなかった一次資料を発見することができた。娯楽と教養を結びつける「上方」放送文化の回路は、さらに資料を積み上げ、人事異動といった人の動きや放送確定表を読み解いて番組の通史の変遷を把握する必要がある。引き続き、東京大阪における一次資料の調査・収集と番組制作者やその遺族への聞き取り調査を実施し、「放送史」から取りこぼされてきたBK制作者たちの「声」の史料化に取り組む。

■ 第二のテーマ「BK史を構成した放送人への聞き取りと資料調査」：(7月-11月)

2017年5月、関西で活動する「自由ジャーナリストクラブ」の会員であり、1995年刊『こちらJOBK』（BK70年誌）の編集メンバーである小山帥人と面談し、社史編纂において重要な役割を果たした大塚融氏をご紹介いただいた。大塚氏は、1964年にAKに入局、1974年から2003年までBK報道局で関西経済界等を取材した経歴をもつ。2018年度は、大塚氏をはじめとするBK史制作者調査を行う。また『こちらJOBK』で使用された資料の多くは、現在、大塚氏が管理されている。この資料調査にも取り組む。大塚氏をはじめとする社史編纂委員および資料提供者への聞き取り調査は、新たな資料の発見を期待できるだけでなく、東京視点を備

放送文化基金『報告書』平成29年度助成

える「放送史」にほとんど残されてこなかったBKの歴史が、「誰によって」「いかに」構成されてきたか検討するうえで重要である。

本研究は、この作業と番組分析との比較から、「放送史」や「BK社史」に記述されてこなかった製作者の葛藤や対立といった歴史のグラデーションを描出する。

■ 第三のテーマ「個別の番組分析」：(11月-2018年3月)

これまでに渉猟した放送確定表や放送台本、そして人事異動にかんする資料から、占領期に放送されたBK制作の番組において、娯楽と教養を結ぶ回路が強化されたことを確認した。特に、放送台本作家の秋田實や長沖一の参加の裏付けた取れたインフォメーションアワー番組『時の動き』(1950-)と『関西のみなさまへ』(1948-)において、BKらしさは強調されていた。占領下、娯楽と教養を意図的に合成した番組の発見は、占領者に対する製作者の抵抗と評価できる一方で、彼らの思想が外来の表現形式と結びつくことによって、「上方」放送文化を成熟させ、その表現の限界と制約を更新した転換点と捉えることもできるはずだ。2018年度はこの点に着目し、分析を進める。

結 果

本研究は、上述の3つの作業テーマごとに研究を進めた。その成果は、以下のとおりである。

I. 「紙史料および音資料（インタビュー）の収集・整理」（2018年4月-2019年3月）

2016-2017年度には、大阪の大学図書館、上方芸能資料館の他、東京の放送博物館、国立国会図書館、放送ライブラリーの調査から、番組資料の所在確認と多数の文献資料を収集した。2018年度は、こうした紙史料の収集と並行して、東京在住の元放送人や遺族のみなさん7名、関西在住の元放送人11名にインタビューを実施した。NHK学術トライアル研究がはじまったことで、研究者による放送資料へのアクセスの道が開かれたが、資料の複写という面においては未整備のままである。2018年度にインタビューに協力してくださった18名の方々は、こうした事情を鑑み、ご自身が所有されている資料を快く譲渡して下さったり、複写のために貸与して下さったりした。こうして収集した資料のなかには、関係者にのみ配布された非売品の音声資料なども含まれており、整理したうえで、分析に着手する予定だ。こうした調査によって収集した資料から得た知見の一部を、2018年6月2日に関西社会学会で共同研究者の後藤が、2018年6月23日に学習院大学で開催された日本マス・コミュニケーション学会春季大会で丸山が報告を行った。また、2018年9月以来、BK報道番組PDのOB・OGが毎月開催している「環状線の会」へ参加するようになり、新たな研究ネットワークを構築することができた。

当初の計画では、基礎調査は2018年4月から8月までの作業テーマとしていたが、放送博物館（東京）に所蔵されている資料の筆写に時間を要したこと、インタビューの選定に必要な資料を継続して集める必要があったことから、結果として2018年度を通じてこれを行った。

また、貴助成を受けて2017年夏に実施した大阪調査で行った関西地区に多くが現存する「ラジオ塔」の調査を研究会のHPで調査報告を発信したところ、立命館大学の飯田豊先生に関心をもっていただき、『テレビ民族誌（仮）』という共著本に丸山が参加することになった。まずは、テレビの前史に位置付けられるラジオ時代に、BK発の集団聴取がいかなるものだったのか成果をまとめることになったが、今後も継続して、ラジオ塔の役割をどのように「上方」放送文化と結びつけることができるのか検討するつもりである。

II. 「BK史を構成した放送人への聞き取りと資料調査」（2018年4月-2019年3月）

本研究が、2018年4月～2019年3月までに実施した関係者へのインタビュー調査で繰り返し語られたのは、「どうすれば社会の価値観の幅を反映させた放送にできるのか」ということだった。街を歩いて素材を探したこと、土地に根を張ってキャリアを形成したこと、そしてたとえ東京へ異動したとしても「東京を向いて仕事をしない“大阪的”な精神」を持ち続けることといった語りは、議論する場としての公共性を表現する放送を希求してきたBK制作者たちの姿を浮上させる。それは、ウィルバー・シュラムらが『マスコミの自由に関する四理論』（1963年）のなかでのべた「社会的責任論」で言うところの公共放送の姿とは異なり、正しい社会の価値を「与える」のではなく、社会にあるさまざまな価値観を放送に「のせる」仕事こそ「大阪的＝ローカルな」放送として理解・共有されていたということを示している。

こうした一連の語りは、のちの『NHK特集』（1976-89）や『NHKスペシャル』（1989-）といった番組の大型化とは逆行し、協働で番組を制作するというよりは、個人の責任のもとに番組を完成させるという制作体制についての語りとして理解できる。大型番組の場合、さまざまな知を結集することで大きなテーマ（例えば、グローバリ

放送文化基金『報告書』平成29年度助成

ゼーション、エネルギー政策、外交問題など)を扱えるようになったが、他方で取材が世界各地に及ぶことから分担作業となり「顔の见えない」制作者が増加した。それはいうならば、制作者たちを「表現者」としてではなく、「労働者」として扱おうとする流れであり、マス・メディア組織において誰がどのように「編集権」を持つのかという根源的な問題を提起する。

Ⅲ. 「個別の番組分析」(2018年4月-2019年3月)

AK と BK が当番組で制作したラジオ『社会の窓』(1948-54)、『社会探訪』(1948-51)、テレビ『日本の素顔』(1957-64)、NHK『あなたは陪審員』(1961-62)、NHK『映像の記録』(1961-64)、NHK『現代の映像』(1964-68)、NHK『スタジオ102』、NHK『ニュースセンター9時』、JOBK制作の演芸ラジオ番組『上方演芸会』(1949-)などに注目して資料の収集を行なった。

丸山は、これまでに実施した元放送人への聞き取り調査や渉猟した番組・資料の読み込みから、NHK大阪に出自をもつテレビ・ドキュメンタリー制作者(『日本の素顔』(1957-64))が1961年に東京・社会番組部から離脱したことを確認した。政治対立を呼ぶ多様な意見全てを盛り込んだ番組を問題視されてのことだったが、彼らは、松竹を辞した大島渚と共に『あなたは陪審員』(1961-62)というスタジオ番組でテレビ/ドキュメンタリーの可能性を探り続けていた。そこで、番組資料と当事者の語りを収集・整理・分析して、追放者たちがどう「大阪」的な要素を内包させながら、新しいリアリズムを60年代のテレビにおいて開花させようとしたのかという分析に着手した。『あなたは陪審員』は、スタジオに召集された人々が即興的に紡ぐ言葉が彼ら自身にしか語れない生の言葉であるということだけでなく、陪審が進むにつれ様々な当事者が表情を見せたり、言葉にならない「声」を漏らしたりする姿までも画面に映していく「ドキュメンタリー」要素を多分に利用していた。それは、ラジオ時代に開拓された、録音構成以来の「大阪」的なドキュメンタリー表現に見られる特徴的な記録の仕方である(成果①)。また、そのような系譜の延長に表れたテレビ・ドキュメンタリーは、映画産業の人々の目に、従来の映像表現にはない「新しさ」を備えるものとして受け止められていた(成果②)。このように対立的な立場の人々を正面から放送することは、政治的スペクトラムの幅としての多様性を押し広げる「大阪的=ローカルな」試みだったと言える。NHKが歴史認識や社会問題について報道する際、重視してきたのが「多様性」ではなく、不偏不党・中立という言葉のもとに多様な見方や考え方を拒否してきたことを考えると、政治的意見のスペクトラムの端っこを拾い上げるようとする制作態度は、テレビ・ドキュメンタリー史を記述する上で、いま一度検討する意義がある。

後藤は、BK職員ではない者の制作サイドへの起用が、占領期の番組形成にいかに関与したのかを検討した。戦後、はじめての大阪発の番組となった『上方演芸会』では、全国中継において言語的な葛藤が生じ、調整が行われた結果、人気番組となった(成果③)。また占領下の制約のなかで、人々の戦争経験を共通の掛け金としてローカルな表象を滑り込ませ、戦前と戦後の大阪を結びつける内容が放送されていたことを明らかにした(成果④)。

それぞれのメンバーが資料を積み上げることを通じて、単なる「アンチ中央」「アンチ東京」という対抗意識から「上方」放送文化は生み出されたのではなく、ヴァナキュラーな声と音を伝えるものとしていかに成立・展開してきたのかについての考察を進めた。以上、提出した研究計画に沿って研究を進めた。

参考文献

1) JOBKのメディア史研究会ホームページ(設立年月日:2018.2.8), <http://jobk-mediahistory.com>

成果の発表

- 1) 「ラジオ・ドキュメンタリー「録音構成」の成立:NHK『街頭録音』と『社会探訪』」、『マス・コミュニケーション研究』95号、丸山友美、2019年7月発行予定。
- 2) 『トレーディング・ゾーンとしてのテレビ・ドキュメンタリー:NHK『日本の素顔』(1957-64)に注目して』、丸山友美、日本映像学会第25回ショートフィルム研究会、於大須市シアターカフェ、2019年2月3日個人口頭発表。
- 3) 「大衆とつくるラジオ番組- 占領期における演芸番組「上方演芸会」を事例に」、後藤美緒、第69回関西社会学会、於松山大学、2018年6月2日個人口頭発表。
- 4) 「ラジオ放送作品における大阪と戦争の再構築- 放送作家・長沖一の占領期下作品を事例として」第70回関西社会学会、於関西学院大学、2019年6月2日個人口頭発表。

連絡先

JOBKのメディア史研究会ホームページ、<http://jobk-mediahistory.com>

(2019年6月30日提出)